

機関誌

# 観光文化

Tourism Culture

## ～40年のあゆみ～

機関誌「観光文化」は財団法人日本交通公社の機関誌として、1976年12月に創刊し、2016年12月に40周年を迎えました。

創刊以来、それぞれの時代における観光のトピックを特集テーマに据え、各テーマに造詣の深い有識者の方々からのご寄稿をいただきながら、当財団の研究員も執筆をおこなってきました。

215号（2012年10月発行）からは、隔月発行から季刊（年4回発行）とし、当財団の研究活動の発表を中心とする内容に刷新しました。

「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」（西尾壽男 元会長）という言葉にもある通り、「観光文化」という言葉には、当時より強い思い入れがありました。

機関誌「観光文化」として、各時代の観光をどういった視点で捉え、どのようなメッセージを発信してきたのか。各時代の機関誌「観光文化」に再度注目いただけましたら幸いです。



特集 「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指して

事務局移転と「旅の図書館」リニューアルにあたりまして 本誌 巻人

1 新しい「旅の図書館」のご案内 大田 美穂 2

2 「旅の図書館」蔵書の紹介 大田 美穂 4  
コラム「読者のニーズに応える図書館サービス」 本誌 編集 27  
コラム「読者の読書への期待—観光研究者の立場から」 大田 美穂 29

3 公益財団法人日本交通公社がお薦めのする  
「一度は読みたい—観光研究書本実務書100冊」 大田 美穂 31  
読者の会—読者の会— 大田 美穂 32

4 人と情報、地域をつなぐ図書館  
読者の会—読者の会— 大田 美穂 34

5 旅心を誘う、旅の本のレジンド30選 大田 美穂 39

読者の会—読者の会— 大田 美穂 47

読者の会—読者の会— JTJFモバイル観光センターによる  
地域の健康診断の実践 中島 幸一 49

活動報告 「平成28年度観光地経営講座」を開催 前掲 近藤 浩子 53

機関誌「観光文化」  
創刊：1976年12月  
発行時期：季刊（1月、4月、7月、10月）  
発行部数：4,000部  
定価：1,000円

### 創刊のことば

「観光文化」創刊時の会長であり、観光文化資料館（現・旅の図書館）創設者である西尾壽男の「創刊のことば」をご紹介します。

「観光文化に関する情報をひろく提供するとともに、観光についての調査研究の発表の場とするための定期刊行物として位置づけています。」

### 創刊のことば

財団法人日本交通公社は、明治45年創業以来

観光とともに生きて参りましたが、昭和38年に旅行に関する営業部門のすべてを新たに設立した「株式会社日本交通公社」に移譲して、財団は公益法人として専ら調査・研修を中心とする観光界の水準向上のための活動に専念して今日に至っております。この間においては、種々観光に関する研究や調査の成果を発表してまいりましたが、このたび観光文化に関する情報をひろく提供するとともに、観光についての調査研究の発表の場とするための定期刊行物として「観光文化」を創刊することとなりました。

わたしは、この誌上を通じて皆様とコミュニケーションを図ってまいりたいと考えておりますことが三つあります。

先づこの観光という広い業態の各企業や団体で活躍の方々は、常にいろいろな理想や、また一方でさまざまな問題などをお持ちのことと思いますが、わたしども日頃考えておりますことをこの誌上でご披露するとともに、広く各界の有識者や専門家の門を叩いて、真に観光界全般の向上発展を目指すための直言として、わたしどもの気づかない盲点やあまりふれがらない側面にまで迫るようなご意見やご批判をどしどし発表していただきたいと願っております。



第2に、当財団の事業である各種の調査研究の成果や、さらに観光界の動きのなかでできるだけ広く集められた新しい情報を導入して、それを皆様がたのご参考にご利用したい所存であります。そして、最近における余暇活動や観光界をとりまく情勢の変化と考え方の進展にかんがみて、わたしどもはその原点に立ちかえって考え直す必要があると感じており、また益々高度化していく旅行愛好家の要請にこたえることのできるような、より文化的な、また専門的な情報の紹介には特に努めてまいりたいと思います。

第3としては、観光界に活躍される方々、とくに新進気鋭の土が日頃の研修の成果や提言の発表の場となり、またそれゆえに、さらに後につづく人々の自主研究の活発化が促進されることによって、観光事業の一層の発展と向上に役立つことを大いに期待いたしております。

読者の皆様におかれては、どうかこの「観光文化」の成長を温く見守り、今後とも絶大なご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

財団法人 日本交通公社 会長 西尾壽男

# 機関誌「観光文化」の変遷と歴代編集長

観光関連の  
主なできごと

歴代編集長

- 海外旅行倍増計画（テン・ミリオン計画）発表（1987）
- 総合保養地域整備法（リゾート法）成立（1987）
- 国鉄民営化（1987）
- WTO（世界観光機関）に加盟（1978）
- 世界遺産条約締結（1992）
- バブル経済崩壊（1991）
- 改正祝日法（ハッピーマンデー法）公布（1998）
- 観光庁発足（2008）
- 観光立国推進基本法施行（2007）
- ビジット・ジャパン・キャンペーン開始（2003）
- 明日の日本を支える観光ビジョン策定（2016）
- 長野冬季オリンピック・パラリンピック開催（1998）

1976-1978	1978-1985	1985-1990	1990-1991	1991-1994	1994-1995	1995-2002	2002-2011	2011-2016	2016-
土井 厚	柳井 乃武夫	高桑 清明	皆川 慎吾	高橋 洋	山本 雅一	蘆澤 順	外川 宇八	片桐 美德	有沢 徹郎

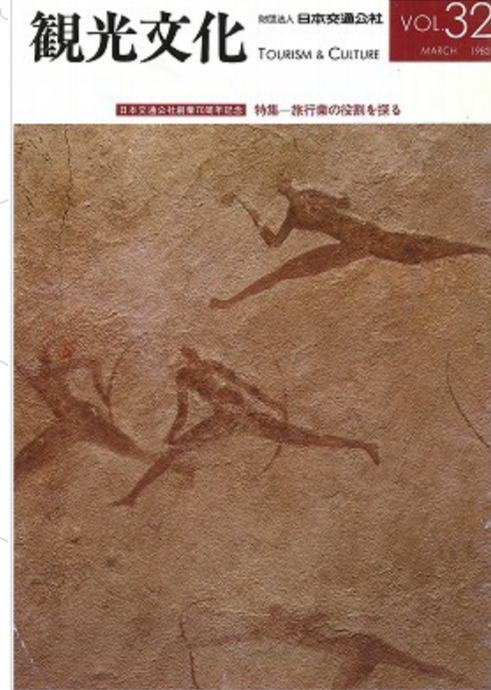
1976



機関誌「観光文化」  
創刊（1976.12）

1980

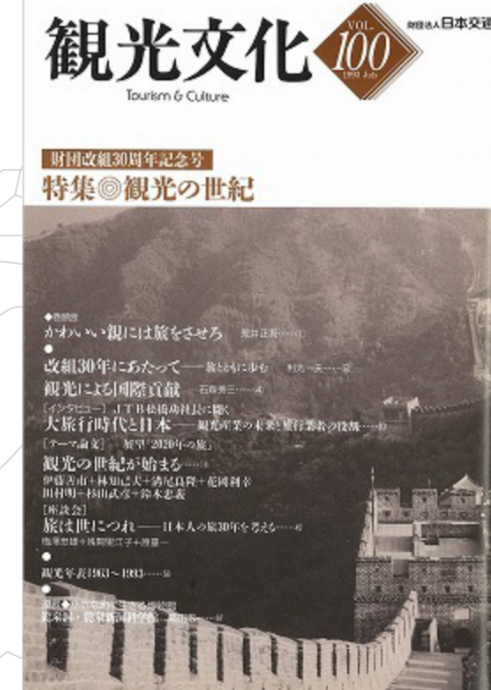
1982



32号（1982.3）  
旅行業の役割を探る  
（創業70周年記念号）

1990

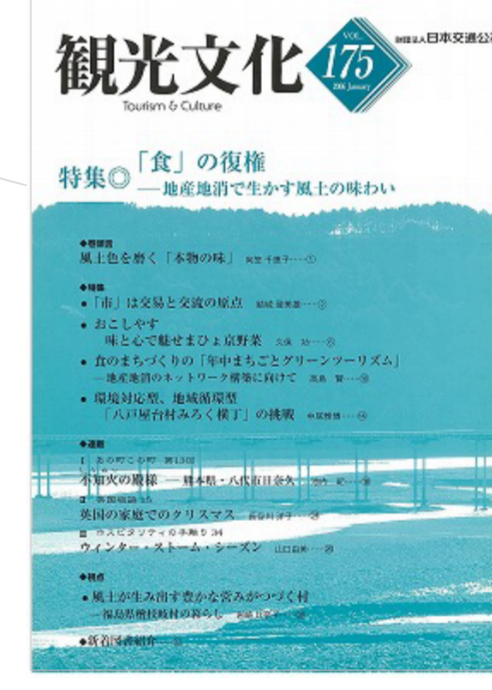
1993



100号（1993.7）  
観光の世紀  
（財団改組30周年記念号）

2000

2006



175号（2006.1）  
「食」の復権  
—地産地消で生かす風土の味わい—

2010

2012



215号（2012.10）  
観光地づくりの本質を探る  
—観光まちづくりの「心」とは—

1978



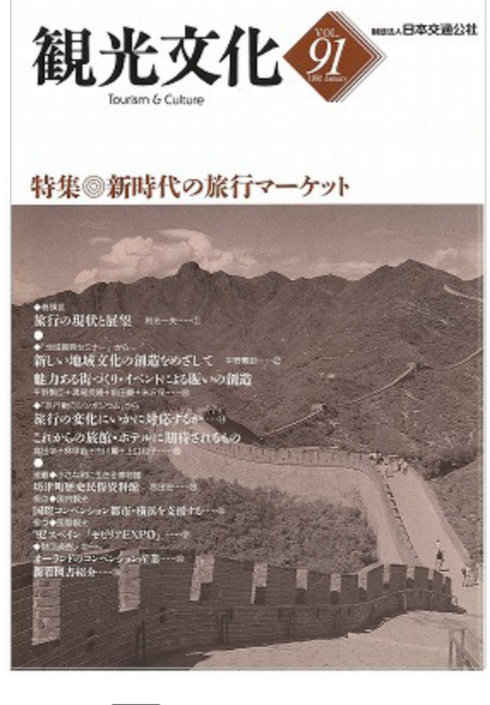
観光文化別冊（1978.10）  
「観光文化と旅」

「観光文化と旅」

「観光文化と旅」は、観光文化資料館（現在の旅の図書館）に寄せられた問い合わせの内容を元に、「巡礼の旅」「食べものの旅」「クルーズの旅」など、テーマ別の旅の楽しみ方を記したものです。

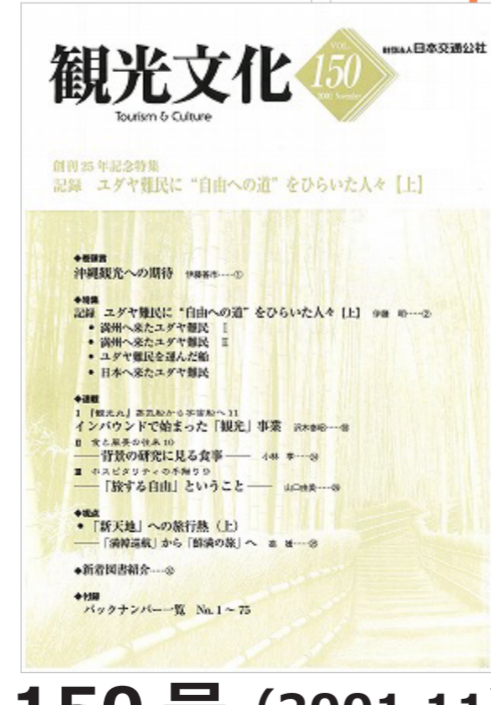
1984年までに7号発行されました。

1992



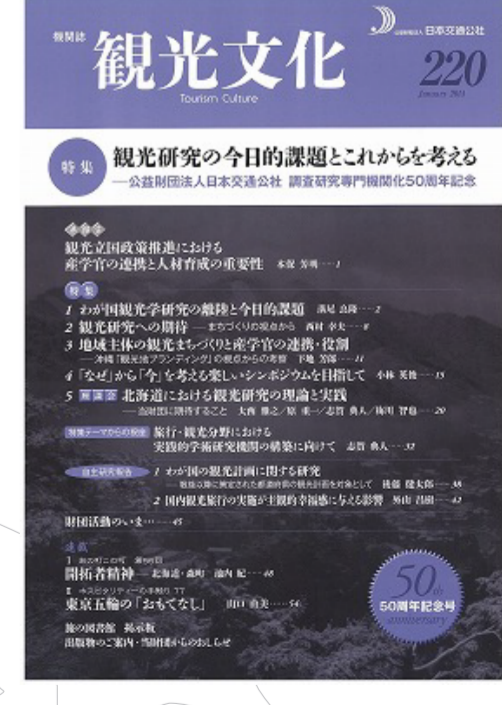
91号（1992.1）  
新時代の旅行マーケット

2001



150号（2001.11）・151号（2002.1）  
創刊25年記念特集  
記録 ユダヤ難民に  
自由への道をひらいた人々（上）（下）

2014



220号（2014.1）  
観光研究の今日的課題と  
これからを考える  
—公益財団法人日本交通公社  
調査研究専門機関化50周年記念—

隔月刊→季刊  
B5→A4

# 巻頭言と連載

## 巻頭言

巻頭言は、観光業界の方々のみならず、大学教授、評論家、作家や画家など、多様な分野の方にご執筆いただいています。

多様な視点からの鋭いメッセージは、特集への期待をふくらませるとともに、より深く内容を捉える上でも重要な存在です。

56号 クルマ時代の観光地 (1986.1) 巻頭言  
「一見」への反省 岡田 喜秋 (横浜商科大学教授)

**巻頭言**

### 「一見」への反省

横浜商科大学教授  
岡田 喜秋

日本はカメラ王国なので、旅に出ると、じつじつと撮りまくる。しかし、その功罪は半ばはばしている。出会う対象を肉眼でよく見ないうちに、シャッターを切ってしまうことだ。外国へ旅行する団体客は、観光バスから降り立つと、すぐに同行者同士で互いに記念撮影し合うの忙しなく、とりまき風景の方はほとんど見ていない。ここではせっかく行ったのに物足りない話だが、二十年越し笑えない事実である。

カメラの性能がよいのもよしもあしてある。という感じが深い。なぜなら、旅とは、自分の肉眼で見ることの意味があるので、見だものを見るに頼る中で消化してしまいがちだ。

ヨーロッパの町中で写真を撮りすぎて、帰ってきても現像してみると、バリだったのが、ローマだったのかおぼれちゃったと言ったか、知っている人が多い。一時代前には、「百聞は一見に如かず」という言葉があったが、これにちては事情が違ってきている。とくに日本人にとってはそうだ。なぜなら、テレビが普及して、異国の旅先もよく紹介され、行かなくても判ってしま

っている感じが先に立ち、それ故か、はじめて訪れた旅先は必ずなのに、すでに来たことがあるような錯覚におちいる。

「一見」だけならテレビでも可能な世の中である。身体を運んで旅に出た以上、「見る」ことをカメラにばかりまかせることは望ましい。それを知っている最近の心あるリピーターの一部は、「百聞」の代りに「百視」してから海外へ旅している。

今から二十年間、アメリカにはよく普及した自家用車によるドライブ旅行者の生態を实地調査した社会学者のリースマンは指摘している。「オプティカスのU.S.ハイウェイ30において調べた結果は、景色がよい、といわれている場所下車を停める人が、そこで風景を見ている時間は平均わずか三十秒である」。

二十年前に、すでにこうだった。「一見」であることを思うと、これからの旅を充実させてゆくには、どうしたらよいか、クルマ生産国の日本人としてカメラの有効利用と共に、よく考えてみる必要がありそうだ。

1号  
1976

50号  
1985

100号  
1993

150号  
2001

200号  
2010

## 連載

シリーズとして掲載している連載は、旅行ジャーナリストや作家、エッセイストなどの方々にご執筆いただきました。

現在は、当財団の専門委員の先生方による「私の研究と観光」「私の一冊」を掲載しています。

連載 I

シリーズ  
旅行業を考える  
シリーズ  
旅と文化

連載 II

連載 III

詩人のふるさとを訪ねて (増田れい子)  
小さな町に生きる博物館 (高田宏)  
旅日記の文化史 (春名亨)

平成の東海道中記 (鈴木和平)

『観光丸』蒸気船から宇宙船へ (沢木泰昭)

歴史街道の今昔 (紅山雪夫)

画家たちの旅 (安野光雅)

あの町この町 (池内紀)

私の研究と観光 (継続中)

岩倉使節団に嵌って30年 (泉三郎)

明治のジャパノロジスト  
F. ブリンクリーの「美しい国ニッポン」 (沢木泰昭)

食と風景の往来 (小林亨) 英国物語 (長谷川洋子)

風土燦々 (飯田辰彦)

ホスピタリティの手触り (山口由美)

私の一冊 (継続中)

86号 環境観光 (1991.3) 巻頭言  
「不思議な風景が見えるところから地球にやさしい旅、がはじまる」 羽仁 進 (映画監督)

**巻頭言**

### 不思議な風景が見えるところから地球にやさしい旅、がはじまる

映画監督  
羽仁 進

私の知人に「人間を見るためにだけ、旅をする」と言われ、そのとおりに実行している人がいる。思えば、旅とは、旅の対象に「対峙」する行為である。対峙とは、ハッキリと言わなくても、多くの人の旅に対するイメージには、似たところがあるのかもしれない。

もう何年も前のことだが、アフリカのキリマンジャロの見える崖に泊っていたら、足音を聞き入ってきた一団が、「砂漠はもうたくさんだ。早く町に戻ろう」と叫び、ツアー・コンダクターに抗議しているの聞いたことがある。

たしかに、人間にとって、一番興味のあるのは、人間であろう。しかし、というか、だからこそ、旅に出たときくらいは、自然とか、滅びてしまった人の影といった見え難いものを見つめてもよいのではないだろうか。

産業革命が大成して、世界の七つの海を支配していた十九世紀のイギリスで、自然に對する情熱が生れたのは、偶然とおもえない。それでは、塵の出でなければ、絶頂上の聖地であったアルプスに、新たな眼をそそぐ

うとした人々も、この時代に生れた。もともと、眺かしいのは、そのあとである。アルプスに對する情熱から生れた登山が、征服を競う国際的なレースに変わると、素直に自然をみつめるには、よほど心を決めてかからないと、駄目だ。

誰でも、幼ない頃、小さな生きものを掌中に入れてみていたように、自分までその生きものと同じく小さいかくなつたような奇妙な感じを味わったおぼえがあるだろう。あんな気持ちを、味わせてくれる旅、というものもあるのだ。

そうすると、風に乗って飛んでくる砂の一粒が、どんなスベクタクル・ショウが来になつてもかわらない不思議さで、迫ってくる。「地球にやさしい旅」が出来るためには、このような感覚の転換が、まず必要なのではないか。風もない静かな谷間で、花びらが舞い、まるで無数の蝶のように舞いながら飛んでいく。そんな光景が見れるためには、人間は立つた立場を捨てる必要がある。

いつまでも心に残る風景。それは、私が、自分を宇宙の中の微小な存在だと感じた瞬間にだけ見たような気がする。私は、そんな心持で、旅がしたい。そこから、環境を見る眼も生れてくる、と思う。(はに、すずむ)

133号 やっぱ日本に行きたいね 巻頭言  
「インバウンド・ルネッサンスのすすめ (1999.1) 巻頭言  
「観光業も「輸出」に励もう インバウンドにかかる未来の成長」 吉野源太郎 (日本経済新聞 論説委員)

**巻頭言**

### 観光業も「輸出」に励もう インバウンドにかかる未来の成長

日本経済新聞 論説委員  
吉野 源太郎

観光は巨大な潜在成長市場を持つ。今日日本では極めて珍しい産業だ。この縮み世の中で、観光に携わる人たちはその幸せを分かち合えなければならぬ。

日本の観光は今日、「輸出」を奨励されている唯一の産業である。観光の輸出にあたるのが海外からお金を運んでくるインバウンドだ。日本の観光を支えている大企業はほとんど輸出に頼れない。これに比べると観光の輸出は智慧を駆使してささいな商売の中で、海外でも歓迎される。せいぜい数千円だ。

ところが日本を訪れる外国人観光客はまだ四〇〇万人前後にすぎない。国内観光市場全体から見るとほとんど無に等しい数だ。昨今の不況でも日本では年間開業二億人が旅行に出かけ、旅行関連消費は総額十八兆円に達する。

外国なら、この自国民の旅行消費に敵するだけ海外から観光客が来る。特別、観光を主力産業にしている国でも毎年四千万人の外国人観光客を受け入れている。フランスになると二千万人だ。ところが日本では自国民市場が「旅行市場」のほぼすべてなのである。つまり、これまで日本の観光産業は日本人の懐だけを見て生きてきたわけだ。こんな国は世界でも日本だけだ。

ほとんどの日本人は「旅行」を「遊び」と思っている。だから「日本人市場」もまだ伸びていく可能性はあるが、しかしそれは限界がある。一方、国境を越えて地球の上を動き回っている観光客の数は毎年五億人(二〇一〇年には九億人)になるという。日本人の海外旅行客が急増したとしても、一七〇〇万人程度。「外国人市場」がいかに巨大かが分かる。日本で観光が将来有望な成長産業と言われるのは、むしろインバウンド市場があるからなのだ。

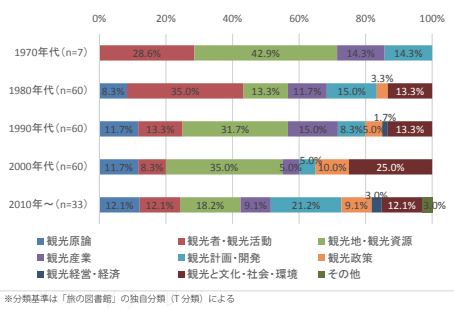
それにして、この国際時代にこれからインバウンドを手がけようという動きが、日本では遅すぎる。必要だ。願望を込めて、たわけでもないので日本が観光の最前線になつてしまつたのは、観光業界と自治体の怠慢以外に理由はない。言い換えば日本の観光関係者は国際視野を欠いて、世界と無関係な閉鎖的な自国市場を旅行客に閉ざしてしまつたと言つてもよい。

「インバウンドは手間はかかる」という言葉を、この際、観光関係者は完全に払しょくしなければならぬ。日本にも世界に通用する観光産業はたくさんある。しかも観光も関係者の努力次第だ。大手は目の前にある。日本の観光が強い国際競争力を持つことは二十一世紀の日本経済の行方を左右すると言つても過言ではない。国内の力を磨いて、海外に目を向けてほしいのだ。(よしのけんたろう)

# 特集テーマの変遷

## 特集テーマの分類 (70年代～90年代)

1970～80年代は女性や高齢者などの特定マーケットをはじめ、旅行スタイルなど「観光者・観光活動」に関する特集が多く見られました。  
90年代に入ると自然、温泉、食、農山漁村といった資源に焦点を当てた「観光地・観光資源」や、旅行業・宿泊業など「観光産業」に関する特集が増えました。



## 特集テーマの分類 (2000年代～)

2000年代に入ると日本の文化やライフスタイルと観光との関連に関する特集が増えました。  
2010年以降は地域振興などを主とする「観光計画・開発」関連の特集が増加するとともに、「観光研究」や「観光経営・経済」などの特集も登場しています。

## 「観光文化」の編集

「観光文化」は編集委員会が中心となり、年初に年間の特集テーマ方針を決定します。さらに各号のスケジュールにあわせて責任者が構成案を提案し、議論しながら内容を詰めています。  
215号以降は調査研究部門の研究成果をご報告する機会も増え、研究員自身が執筆する機会が増えました。

## より良い機関誌に向けて

「創刊のこぼれ」にもある通り、読者のみなさまとの交流や意見交換を通して、より良い機関誌をめざしてまいります。  
感じたことや考えたこと、取りあげてほしいテーマなど、忌憚のないご意見をお気軽に寄せただけましたら幸いです。



## 1976年～1979年

- ※11号までは特集なし
- 12号 観光と情報
- 13号 80年代の海外旅行
- 14号 80年代の陸上輸送
- 15号 1980年代のホテル産業
- 16号 旅行志向の変化とリゾート
- 17号 観光と開発
- 18号 旅行者の求める「観光」

## 1980年～1989年

- 19号 パッケージ・ツアー
- 20号 日本のパッケージ
- 21号 サラリマンの休暇
- 22号 文化・教養型の旅行
- 23号 旅行と情報社会
- 24号 「団体旅行」を見直す
- 25号 「熟年社会」の観光
- 26号 女性から見た観光
- 27号 これからの修学旅行
- 28号 旅を楽しむ工夫
- 29号 ミドルエイジと余暇
- 30号 現代の観光の意義を考える
- 31号 これからの社会と旅
- 32号 旅行業の役割を探る  
—日本交通公社創業70周年記念
- 33号 国際交流と観光
- 34号 望ましい国内観光の実現に向けて
- 35号 旅行需要の創造と誘発
- 36号 快適・安全な旅の実現に向けて
- 37号 情報化社会と観光
- 38号 学習社会と観光
- 39号 旅のマナー
- 40号 家庭生活と観光
- 41号 高齢化社会と観光
- 42号 観光の活性化をめざして
- 43号 旅の歴史と将来
- 44号 国際交流と海外旅行  
—海外渡航20周年
- 45号 旅行と学芸・文化と観光
- 46号 旅行に対する価値観と志向
- 47号 新しい旅の形を求めて
- 48号 熟年者の旅
- 49号 地域振興と観光
- 50号 旅上手な外国人旅行者
- 51号 旅館はどこへ —中小旅館の生き生き道
- 52号 旅館はどこへ  
—何を特色として打ち出すか?

- 53号 観光地の変遷
- 54号 観光地のあり方
- 55号 観光地 —ブーム倒れにならないために
- 56号 クルマ時代の観光地
- 57号 観光時代の旅のかたち  
—ドライブ旅行者の意見
- 58号 日本を世界に開く—地域の国際化
- 59号 日本人の休み方・遊び方
- 60号 転換期—カル線がはばかる  
—地域観光の核として
- 61号 観光と文化財保存
- 62号 観光事業とサービス
- 63号 地域おこしの核—地方都市
- 64号 瀬戸大橋—観光はどう変わるか
- 65号 活路をさぐる温泉観光地
- 66号 1000万人—海外旅行倍増計画
- 67号 海外旅行 —いろいろなきしみ方  
—海外旅行倍増計画Part II
- 68号 あらためて海外に目を開く  
—海外旅行倍増計画Part III
- 69号 「教育旅行」—修学旅行の新しい発展
- 70号 コンベンション —にぎわいの場をつくる
- 71号 ツーリズムアクションプログラム  
—90年代観光振興行動計画
- 72号 見直されるバスツアーの魅力
- 73号 独自性のある地域振興
- 74号 テーマのある旅
- 75号 N I E S観光客の台頭
- 76号 食べ文化を旅に訪ねる
- 77号 民家ウォッチング
- 78号 織り、着る文化を訪ねる

## 1990年～1999年

- 79号 観光開発と地域振興を考える
- 80号 四季型余暇・休暇のすすめ
- 81号 休暇の集中を避けるために  
—欧米ではどうしているか
- 82号 世界に通じる温泉観光地
- 83号 旅日記の文化史
- 84号 海外職場旅行
- 85号 国際交流による地域振興
- 86号 環境観光
- 87号 旅館料理
- 88号 安全旅行
- 89号 21世紀に向けた観光振興の方策
- 90号 旅行ガイドブックの研究
- 91号 新時代の旅行マーケット
- 92号 卒業旅行
- 93号 旅と味覚
- 94号 家族旅行
- 95号 伝統行事を観光に活かす
- 96号 土に憩う—都市と農村の交流
- 97号 旅館・ホテルのサービスを考える
- 98号 新しい鉄道旅行地図
- 99号 旅館料理の新たな展開を考える
- 100号 観光の世紀 (財団改組30周年記念号)
- 101号 観光文化振興基金による助成研究報告書
- 102号 旅館・ホテルと地域社会
- 103号 旅行の現状と展望
- 104号 海外旅行この30年
- 105号 旅館料理の基本を振り返る
- 106号 変化する旅行者の嗜好と宿
- 107号 国際会議誘致法の成立と地域振興を考える
- 108号 温泉、自然資源と変遷する観光
- 109号 旅行の現状と展望
- 110号 変わるゆくり観光地の魅力づけ
- 111号 インバウンドを考える
- 112号 ツーリズム・フォー・オール  
—<旅のノーマライゼーションのすすめ>
- 113号 観光政策の基本的方向  
—観光政策審議会答申から
- 114号 旅行業法・約款の改正と今後の旅づくり
- 115号 戦後から平成へ  
—旅行雑誌「旅」が語る五十年
- 116号 成功する観光地の活性化とプロモーション  
—欧米の事例より
- 117号 変わるサービス、変わらないサービス  
—今、ツーリズム産業に求められるもの
- 118号 あなたの日本はどこですか?  
—「旅フェア'96で学んだもの、見つけたもの
- 119号 いい国つくり  
—「21世紀」の「観光開国」宣言!  
—「1976年7月21日」より
- 120号 自分の地域を愛せますか、誇れますか  
—「1976年7月21日」より
- 121号 「1ターン」ターンでまちづくり  
—地域に魅せられ、その振興に頑張る人々
- 122号 道がつなく、道がたりもつ—人・地域  
—観光街道の魅力とその目指すところ
- 123号 留学生がつくる、新しい世紀への架け橋  
—あなたは日本のどこが好きになりましたか
- 124号 東京再考  
—私たちが暮らしぶりが伝わる街が好き  
—都心に蘇る歴史的建造物の魅力と価値
- 125号 成功するコンベンションシティ  
—顔が見える都市、ここが見える交流
- 126号 星空と地球にやさしい街づくり  
—ライトダウンがもたらすもの…
- 127号 「三半世紀」(30年) 前の  
未来予想を今、ふりかえる
- 128号 昔風景を頼る・聞く・学ぶ
- 129号 唇が語る地域の暮らし
- 130号 お天気と旅—雨の魅力と不思議
- 131号 民営鉄道快走! その新しい試みと知恵比べ
- 132号 日本型エコ・ツーリズムを探る  
—その美しい成熟に向けて旅する人々
- 133号 やっぱ日本に行きたいね  
—インバウンド・ルネッサンスのすすめ
- 134号 偉大なる地域の宝物、産業遺産を探る
- 135号 オートキャンプ—もう一つのライフスタイル
- 136号 評価・格付けから学ぶこと、活かすもの
- 137号 観光地の「トイレム」  
—その環境保全と整備
- 138号 旅の原点は信仰にあり

## 2000年～2009年

- 139号 西暦2000年の今、  
「未知の国ニッポン」は何故  
地名によって忘却される・甦る歴史
- 140号 峠は今、・・・
- 141号 「クルーズの時代」とは、...
- 142号 資源保護からの温泉再検証
- 143号 二〇世紀の旅人
- 144号 二〇一〇年の旅人像
- 145号 海外ガイドブック考現学
- 146号 東海道400年
- 147号 街道ウォーキングのススメ  
—観てから行くか、行ってから観るか  
—横つなげたい。フィルム・コミッション
- 148号 今世紀も「お客様は神様」ですか?  
—今世紀も「お客様は神様」ですか?
- 149号 創刊25年記念特集 記録
- 150号 ユダヤ難民に自由への道をひらいた人々 上
- 151号 創刊25年記念特集 記録
- 152号 ユダヤ難民に自由への道をひらいた人々 下
- 153号 届けたい自然ガイドプログラム  
—作りたて新しい「つながり」
- 154号 「芭蕉」しますか、それとも「弥次喜多」ですか  
—旅行文化人の勘違い! ?を探索  
—「9・11」が意味するもの
- 155号 元気の源は田舎にあり! !  
—都市と農村の交流・共生を求めて—
- 156号 友好の絆よ永遠に!! 国際正常化30周年  
—新時代を迎えたい日中交流
- 157号 江戸開府400年—江戸から東京へ  
—京都水物語—水とともに暮らし古都  
—スローツーリズムを考える  
—旅は人生。今、スローな旅とは・・・
- 158号 新・観光立国— 観せるべき日本の光とは
- 159号 世界遺産— 光と陰
- 160号 地域ブランドとは何か
- 161号 里山— その価値と活用
- 162号 スポーツと地域社会  
—今、スポーツが地域を熱くする
- 163号 景観形成を問う
- 164号 パリアフリーからユニバーサルデザインへ  
—ウエルネスでツーリズム活性化
- 165号 深まる日韓交流  
—その背景・意義と将来展望
- 166号 歌舞舞の魅力  
—400年の歴史を生きた伝統文化の世界
- 167号 都市と路地  
—人はなぜ路地に惹かれるか
- 168号 ジャパニーズクール  
—日本のポップカルチャーの可能性や如何に
- 169号 道路と観光  
—今、道路に期待されること
- 170号 「学び」のすすめ
- 171号 「学び」のすすめ  
—学びこそ人間性回復と地域活力の原点
- 172号 「食」の復権  
—一地産地消で生かす風土の味わい
- 173号 アイルランドの誘惑  
—精神風土とその文化的魅力
- 174号 歩く— 五感で楽しむ観光と出会い
- 175号 観光人材育成  
—観光の未来のために  
—滞在を楽しむ  
—自己充足の新たなライフスタイル
- 176号 観光とホスピタリティ  
—地力
- 177号 一地域を支えるその実力と可能性
- 178号 次世代継承
- 179号 昭和は遠くなりにけり
- 180号 仏教ルネッサンス  
—一お寺と社会の縁起復興
- 181号 宮沢賢治とイーハトーブ
- 182号 源氏物語千年紀を祝う
- 183号 上質な日本
- 184号 足尾銅山  
—その歴史に学び保存活用を期す
- 185号 瀬戸内海の風土と文化復興
- 186号 里山と観光立県千葉
- 187号 ツーリズム新時代
- 188号 夢しの富士山
- 189号 横浜開港150周年
- 190号 日本のこころ桜文化
- 191号 濡れ! 静岡のお茶力
- 192号 ジョバークジャパン
- 193号 山岳宗教都市・高野山— その美と歴史文化
- 194号 平城遷都1300年— 日本の歴史と未来を考える

## 2010年～

- 199号 広がれ日本のフットパス
- 200号 旅詩歌— 一心のかて 旅で授かる生きる力
- 201号 雑文文化と現代—三内丸山に学ぶ
- 202号 みなとまちの賑わい再生  
—一港とまちの一体化を!!
- 203号 九州観光交流新時代—花開くアジアの玄関
- 204号 夜景観光のポテンシャル—光のまちづくりへ
- 205号 観光のフロンティアに挑む
- 206号 自転車と地域振興
- 207号 広がるオープンガーデン活動
- 208号 東日本大震災からの復興に向けた  
—ツーリズムの役割—復興プランへの提言
- 209号 東日本大震災からの復興に向けて、  
人への動き、ツーリズムを創造する  
—一東北の持つ潜在的な「文化の力」を探る
- 210号 日旅交流150周年—これまでの軌跡  
—観光や文化交流の在り方をめぐって
- 211号 日本の森のエネルギー  
—森づくり、森の文化と観光
- 212号 九州新幹線全線開業で「九州はひとつ」  
—一開業後一年、九州ツーリズムの変化と  
—期待される地域活性化への取り組みとは?
- 213号 東京スカイツリー—の景観形成と観光資源  
としての考察—新たなシンボルとしての  
価値創造を多面的角度から探る
- 214号 小笠原観光  
—観光地づくりの本質を探る
- 215号 観光まちづくりの「心」とは  
—指標を活用した持続可能な観光地の管理・運営  
—世界の動向と国内での適用に向けて
- 216号 ホテル・旅館の歴史に見る交流機能と  
文化表現の変遷
- 217号 これからのシニアマーケティングを考える  
—アジアのFIT客を地域へ呼び込む
- 218号 観光研究の今日的課題とこれからの展望  
—公益財団法人日本交通公社  
—調査研究専門機関化50周年記念
- 219号 国際的な視野から見た観光研究  
—観光資源評価研究「美しき日本 旅の風光」
- 220号 温泉地における不易性を探る  
—温泉地、温泉旅館の課題と展望
- 221号 地域振興観光プログラムの流通・販売  
—「売れる」とは
- 222号 観光の経済波及効果を高めるには  
—一地域の消費拠点に進化した「道の駅」に着目して
- 223号 「平準化」を考える  
—成熟化社会の旅と観光地に向けて
- 224号 東日本大震災からの復興に観光は何を果たしたか
- 225号 観光地における雇用環境を考える  
—「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指して